

木々の緑が一段と濃くなってきました。マスクを着用し、密を避けての休日ウォーキングにも慣れてきました。木々や草花、大きな空と鳥のさえずに励まされながら、一日も早く日常が戻ってくることを願いつつ歩いています。現在会員登録数 3,349 人さま。次回は6月1日に特別号 NO.2、6月20日に NO.118 を発行の予定です。／

＋----- ◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■
【1】お知らせ

● YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/channel/UCgPj7D2ReQ0J03zhMMLfuIA>

現在、「YouTube 版 本の海大冒険」には、絵本編、読物編、YA編、科学編があり、毎週金曜日に、その中から、新しい動画を2本ずつ公開しています。今後も、総括専門員・土居安子を中心に、新しい子どもの本を紹介していきます。ぜひ、ご覧ください。

チャンネル登録もお願いいたします。

公開内容一覧は → http://www.iiclo.or.jp/m1_youtube/index.html

● 講演会の報告集を販売しています

『2019年度国際交流事業報告集

国際講演会：韓国の絵本作家パク ジョンチェの絵本を語る

子ども向けワークショップ：パク ジョンチェさんと絵本をつくろう！』

発行：当財団 2020年3月 A4判 42頁 1000円＋税

『2019年度講演会報告集

紙芝居の歴史から子どもの読書文化について考える 講師：浅岡靖央』

発行：当財団 2020年3月 A4判 34頁 800円＋税

詳細、その他の出版物は ↓

http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/05_publication/index.html#hanbai

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

お申し込み、詳細は → <http://www.iiclo.or.jp/donation.html>

● 当財団公式 Twitter → https://twitter.com/IICLO_News

■ ----- ■
【 2 】 コラム
■ ----- ■

《 1 》 この本読んだ？ Yasuko's & Etsuko's Talk

『おいで、アラスカ！』 アンナ・ウォルツ/作 野坂悦子/訳 フレーベル館 2020年3月 対象年齢：小学校高学年以上

あらすじ：てんかんの病が見つかって新しい学校へ通い始めるスフェン（男子）と、大好きな犬、アラスカを弟のアレルギーのために手放さなければならなくなった後、両親が営む写真店が強盗に襲われたパーケル（女子）。学校初日、スフェンは、クラスメイトになったパーケルを教室でからかう。そして、パーケルは、アラスカがスフェンの介助犬となっていることを知りショックを受ける。パーケルとスフェンが交互に語り手となって二人の抱えている問題が明らかになっていく作品。

Y：今回は訳者の野坂悦子さんにお話いただきます。この作品を訳されることになったきっかけをお話ください。

E：これまで『ぼくとテスの秘密の七日間』『100時間の夜』（ともにフレーベル館）を訳してきていて、オランダに住むアンナ・ウォルツの作品は、さまざまな困難に直面している子どもたちが生き延びる様を描いてとても現代的だと思っていました。

そこで本書を読んでもみると、パーケルの犬に対する熱い思いと、パーケルが強盗事件に遭遇した恐怖をフラッシュバックしてしまう様子に強いリアリティを感じました。また、もう一人の主人公、スフェンについては、てんかんであることをどのように感じているのか、いかに生きにくいのかがとてもよくわかる本だと思ったのです。

Y：おっしゃっていることのどれもが、私がおもしろかったと思ったところでした。翻訳で苦労されたところはどこですか。

E：てんかんの描写は、とても気を配りました。また、スフェンがパーケルをどう呼ぶかという人称の問題や、最初、スフェンがアラスカを英語で言うbeastと呼んでいるのをいかに訳すかなど、悩みながら訳しました。

Y：beastの訳は「なるほど！」と思いました（p.39など）。野坂さんが好きな場面はどこですか。

E：アラスカがスフェンの介助犬になったことを知ったパーケルが、夜中に自転車に乗ってスフェンの家に向かうところの描写です（p.56-59）。

Y：私はすぐそのあと、アラスカを誘拐しようと思ったパーケルがフェイスマスクをかぶってボクサーパンツしかはいていないスフェンと対峙するところが好きです。

E：もう一つの場面は、スフェンがパーケルの正体を知って、アラスカにスフェンとパーケルのどちらを飼い主とするかを選ばせる場面。パーケルとスフェンの思いが、たった一文ずつ（p.153, p.156）で表現されていて「巧い！！」と思いました。

Y：この作品は、前半は、スフェンが夜中にやってくるパーケルの正体をいつ見抜くか、後半は、パーケルは強盗犯を見つけるのか、スフェンのてんかん

発作の動画がSNSで拡散されたことがどうなるのか、と読者を惹きつける要素がいっぱいです。

E：作品には、てんかん、犯罪、介助犬、ADHD（パーケルの3人の弟）など、人間社会にあるさまざまな課題が描かれていますが、アラスカという犬を中心に、まとまった大きなストーリーとして読み進められます。そして、全体として、偏見や差別について考えることができる作品になっています。子どもたちには、主人公たちに寄り添いながら、自分の体験として読んでもらえればうれしいなと思います。

* 今回のゲストは作家で翻訳家の野坂悦子さん（E）です。

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

第57回「谷」

返らないこだま

前回の「鳥をとるやなぎ」（当メルマガ NO.116）と同様、藤原慶次郎と「私」の登場する物語です。慶次郎は、賢治の盛岡中学のときの親友、藤原健次郎がモデルともいわれます。つぎが、その書き出し。

〈櫓渡のとこの崖はまっ赤でした。

それにひどく深くて急でしたからのぞいて見ると全くくるくるするのでした。

谷底には水もなんにもなくてただ青い梢と白樺などの幹が短く見えるだけでした。〉

「私」が尋常三年生か四年生のころ、下のほうの野原で、ひとりで野葡萄を食べていると、馬番の理助が声をかけます。――「おいおい、どこからこぼれて此処らへ落ちた？さらわれるぞ。蕈(きのこ)のうんと出来る処へ連れてってやろうか。」自分だけ勝手に歩いて途方もない声で歌う理助のあとをついていて、たどり着いたのは、柏や櫓の林のなかの空き地で、そこには、たしかに、「はぎぼだし」というきのこが、どっさりあったのでした。理助は、「私」に「ひとりで来たら承知しないぞ。第一みちがわかるまい。」といひます。こわい谷に落ちるからというのです。

きのこの場所のことは兄にも話さないままでしたが、翌年の秋、「私」は、藤原慶次郎をさそいます。慶次郎とふたりで、ずんずん登っていくと、去年とはまたちがう、きのこの山に出くわして、籠いっぱいに取ります。帰りがけ、ザアッと雨に降られて、それが急に晴れると……「もう崖だよ。あぶない」。慶次郎が「帰ろう。あばよ。」と向こうのまっ赤な崖に高くいうと、「あばよ。」とこだまが返ってきます。おもしろくなった、ふたりは、何度もさげびますが、「馬鹿野郎。」……そのこだまは返りません。――「そんなやつらにいつまでも返事してられないなと自分ら同志で相談したようにも聞えました。」ふたりは、にわかには恐くなって、顔を見合わせます。

はじめに、ほんとうは入り込んではいけない領域に「私」を連れていったのは、つぎの春には北海道の農場へ行ってしまった理助でした。崖から、こだまが返らなかったとき、「私」は、あらためて、「〈世界〉のへりがあるあの何ともいえぬこわさ」(天沢退二郎 1979年)に気がついたのかもしれない。

「私」と慶次郎は、どんどんどん山をおりて、にげていくことになりま
す。(馬車別当)

(本文の引用は、新潮文庫版『新編 風の又三郎』によりました。)

《3》子どもの本の珠玉のことば 11

「け」

(『やっぱりおおかみ』ささきまき/さく・え 福音館書店 1973年10月「こ
どものとも」、1977年4月「こどものとも傑作集」)

新型コロナウイルス感染症のための「自粛」は長く続き、「け」と言いたい毎
日が続きます。「け」は、ひとりぼっちのおおかみが、「どこかに だれか い
ないかな」と仲間を探し回り、みんなに逃げられて、「け」。墓場でおばけと一
夜を明かし、コンクリートの建物の屋上で、気球がビルから離れて飛んでい
くのを見ながら「け」。

こんな気持ちのときは、「ムッシュ・ムニエルのサーカス」に行き、「変なお茶
会」に参加し、「飛びたかった人たち」のまねをして「ぼくがとぶ」と空をと
び、「そらとぶテーブル」に乗っている人たちに手を振り、空を飛びながら「く
まの木をさがしに」行くと、おおかみが「ぶたのたね」を植えたぶたの木を見
つけ、町に降りると「まちにはいろんなかおがいて」、「怪盗スパンコール」も
お出まし。町で「いとしのロベルタ」に会いに行き、さばくへ出かけて「さば
くのくいしんぼ」に襲われ、「へろへろおじさん」になって、「ねむいねむいね
ずみ」に出会ったら、おかあさんのことを思い出して、家に帰ってふと気づく
と「いないいないばあさん」。やっと見つけて、「はぐ」をしたいけど、今はコ
ロナで無理とがまんし、やっと床につくと、「おばけがぞろぞろ」。「そうおも
うと なんだかふしぎに ゆかいな きもちに なってきました。」「け」。

*「」はすべて、『やっぱりおおかみ』、または佐々木マキの作品からの引用で
す。(Y)

《4》 行って来ました!

※新型コロナウイルス感染拡大防止に伴い、外出自粛が強く求められる状況
ですので、今月は休載とします。ご了承ください。

■ ----- ■
【3】全国のイベント紹介

● ヒグチュウコ展 C I R C U S

会 場：刈谷市美術館 (愛知県刈谷市)

会 期：6月2日(火)～27日(土) 午前9時～午後5時 月曜休館

入場料：有料 中学生以下無料

主 催：刈谷市美術館／朝日新聞社

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html

※イベントの開催内容が変更される可能性があります。最新情報は主催者へお問い合わせください

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

【４】プレゼント

今号のコラム《１》「この本読んだ？」で紹介しました『おいで、アラスカ！』を１名の方にプレゼントします。ご希望の方は、メールで件名「メルマガNO.117 プレゼント希望」とし、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ office@iiclo.or.jp にお送りください。

締切は６月１０日(水)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

ステイホームが続き、最近はやりのオンラインイベントに参加。開始時間前に届いたメールのURLをドキドキしながらクリック。「ちか旅 近所のおもしろい人に会いに行く。」というタイトルで、「おもしろい人」の体験談を聞いた後、体験談をいかに地域に生かしていくかをグループで話し合ったり、みんなで意見を出し合ったりしました。「旅」で想像していたものとは少し違っていました。楽しい初体験になりました。(TA)

みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

http://www.iiclo.or.jp/m1_magazine/index.html パソコンからどうぞ

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL: 06-6744-0581 FAX: 06-6744-0582 E-mail: office@iiclo.or.jp
